２０２０年5月1日AM１2:００～１3:００
ＦＭ富良野「モーニングママス」米田塾長取材内容

みなみ　早速なんですけれども、今日はですね。聴いてくださっているリスナー持ち込み企画ということで、いつも聞いて下さったり、時々出てくださってる大西三奈子ちゃんからですね。ぜひ、みなさんに会って欲しい人がいるということで、ご紹介を頂きまして、私もすごく楽しみにしております。大西三奈子ちゃんがゲストを連れてきてくれました。ということで、まず、おはようございます。三奈子ちゃん。

大西　　おはようございます、南さん。私もマスクで声が聴きづらくてすいません。

みなみ　大丈夫ですよ。美しい声、聞こえておりますので。大丈夫ですよ。はい。あの、今日はそんなことで三奈子ちゃんの方から、つい先日連絡がありまして、ぜひ、みなさんに、特に子育てしている親御さんに向けてご紹介したい人がいるんだよねって、連絡をくれて、私も新聞で見たりもして、気にはなっていたりというか、そういう活動なされているんだなと思ってたんですけれども、本業の方とボランティアの方のお仕事の区別がついていなかったので、今日、お話を伺いながら、そういうのがよく分かってくるのではないかなと思っているんですけれども。

大西　　そうですね。私もぜひ、この地域の皆さんに、私も子育てに悩みもあるけれども、子どもたちの学習というものをね、しっかり守ってあげたいという、そんな、熱い熱い方に去年出会うきっかけがあったので、皆さんにもお伝えしたいと思って、今日よんでいただきました。ありがとうございます。

みなみ　いえいえ、とんでもないです。では、お待たせいたしました。早速、ご紹介したいと思います。NPO 法人共育サポートということで、共育サポートの不登校青年自立支援ボランティア『共育サポート』の代表の米田先生にお越し頂いております。どうもおはようございます。

米田　　おはようございます。

みなみ　よろしくお願い致します。先生は今日、札幌の方からこちらに来られるということで、スタジオの方にもお越し頂きまして、お話をお聞かせ頂けたらなと思います。あの、収録始まる前にちょっと私、実は共育サポートの活動をなされております英数学館の３Ｆの方で広い教室がありまして、そちらの方でちょっと話を伺ってきたのですけれども、英数学館は普通の学習塾だと思うのだけれども、米田先生がやっている『共育サポート』というのは全くボランティアの活動で、そういった学習塾とはまた別な組織で、別な事業をなさっているというのを先程も私、お聞かせいただいたのですけれども、もう大分長いことこの活動をされているというのを聞いたんですが……、いつからされているんですか。

米田　　そうですね。あの一、「共育サポート」いわゆるその学校に行けなくなった子たちのサポートという意味では１５年ほどになります。

みなみ　あー、１５年前からやられているんですね。あの「きょういくさぽーと」って耳で聴いているとあの、教えるに育てるという字が思い浮かぶかなと思うんですけど、私今、お名刺見ているのですけれども、「共に育つ」という意味での「共育サポート」という文字を使っているのですけれども、なんかそれだけ、これを見るだけでも思いが伝わってくるというか、わかるなと思うのですが、そういう感じがすご

くしているところなんですけれども。そもそも１５年前にその活動を、その不登校のお子さんたちの教育をサポートするというところで、ボランティアで活動をはじめられたというきっかけみたいなものがあれば、もしあればお話し伺えればありがたいかなと思うのですけれども。

米田　で、あの一、学習塾、いわゆる英数学館自体ははじめて３０年以上経つのですけれども、２００５年だと思うのですが、滝川市で小６のいじめ自殺が問題になりました。その当時から「いじめ」という言葉がひどく一般的になってきた時です。で、ふっとその子どもたちの方に目を向けるとここ富良野でもそういう「いじめ」は一般的にあるんですね。で、その中で孤立したり、あと悩んだりしている生徒、もしくは保護者が非常に気をつけてみるとたくさんいるということに驚いて、ああこれはこのままではいけないと思って、そのサポートを、いわゆる塾とは関係なくですね、支援というようなかたちでサポートを始めたのがきっかけです。

みなみ　なるほど。本当にもう、あの、滝川で起こった事件だったけれども、それは本当に間近で毎日毎日、お子さんたちを前に現場で過ごしていらっしゃる先生だからこそ、きっと他人事じゃないなというところが感じられたということでしょうね。

米田　そうですね。

みなみ　まさにほんとにそういった問題が多分いろいろと起こっていた時期というか、たて続きに起こっていた時期、今もないことはないと思うので、そういったことが、現場の方が当事者意識をもって何かしら動いて下さるというのは親御さんにとってものすごく心強いことなんじゃないかなというふうに思って、私も話を伺っていたのですけれども。実際にじゃあそうやって今、自分が関わってらっしゃる、御自身が関わってらっしゃる子どもさんたちのサポートをしようっていった時に、どういったところからスタートされたんですか、はじめられたきっかけはその滝川のお子さんだったと思うのですけれども、どういったところからそういった支援というか関りが始まったんですか。

米田　まず子どもを見て、子どもの変化に気付いた時ですね。その時に調査をして、その子がどういう状況にあるかということを、一番力になったのはやっぱり同じ同級生ですとか、周りの子どもたちからの情報です。いわゆる子供たちは学校では学校の顔があって、親の前では親の顔あって、で子どもたちには子供たちのつながりがあってというふうになってますから、そこら辺でつまり周りの親だとか教師が見えない部分から情報を頂いたり、もしくはその一緒に考えたりとかというのは一番多い形ですね。

みなみ　うーん。なるほど。

大西　目に見えてそこの目の前にあるわけでなくってね、潜んでいるものをどうやって見つけていけるかって、大事なことですよね。

みなみ　ほんとにそうですよね。

米田　生徒の前に立っていれば、前回とちょっと違うなってのは当然見えてきますんで。それがやはりきっかけですよね。

みなみ　お子さんの様子を見ていてちょっと違うな、なんか元気ないぞ、なんか変だぞみたいなことをキャッチしたところから始まるということですよね。

米田　　そうですね。必ずそれは出てきます。それはね。

みなみ　やっぱり、それって家庭でもある意味見つけられればいいんだろうけれども、そこがまたさっき先生がおっしゃっていたように、学校の顔、家庭での顔、また違うところでの顔、また第三の居場所みたく学習塾という場所がそうなっていたのかもしれないですね。で、同級生たちから話を聞いて、率直に、素直にそういう話をしてくれるものですか、子どもたち。

米田　　あっ、子どもたちとの関係、いわゆるその私は基本的に子どもたちとの関係というのは「教える」という関係はあまり作ってこなかったんですね。「伝える」という関係しか作って来ませんでした。

みなみ　うーん。なるほど

米田　　ですから子どもたちに対するものっていうのは、ちょっとこれフレンドリーとは違うのですけれどもあくまでも、大人が子供とつながって、伝えて、子どもが大人になっていく過程というのを教育というふうに考えていますから、敬意をもって子どもたちとは関係を作ってきたつもりです。

みなみ　すばらしい。なんかもう、そこにむちゃくちゃ共感するのだけれど、本当に教えるって、どこか上から目線で、なんか「お前ら知らないから教えてやる」って、そんな偉そうじゃなかったとしても目線が高いところから一方的に何か、一方通行のイメージがあるのですけど、今、「伝える」って、すごく目線が一緒の感じがするんですよね。すごくそれだけでも、イメージできました。うーん。そういったことを意識しながらも、すでに学習塾でやってらっしゃる時からもうそんな関係を作ってきた……、まず、その土台があったってことですよね。

米田　　はい。

大西　　素晴らしいですよね。

みなみ　これは教育現場どこでも、学校に限らず、家庭とかでもそうだろうし、子どもを尊重する、子どもの人権を尊重するとか、まあ、そういったことのベースがあったということが今、すごく大きかったのだろうなとちょっとお話を聞きながら……思っていたのですけれども。そこからだんだん始まって行って、つながって行って、「共育サポート」の事業をやっていかれたのかなと思うのですけれども、実際、何か問題があったり、ちょっとどうしたの、大丈夫かなって、先生が気になった子に関わり合うことによって、やっぱりそれって、親御さんともつながっていくのかなってちょっとお話を聞きながら思ったりしたのですけれども……。

米田　　そうですね。まず、例えば今の不登校、よく最近のケースでは子どもが一番孤立化しているように思うのですけれども、保護者、親も同じように孤立化しています。ですから、私が一番最初にやるのはあくまでも、子どもだとか親の代弁者として、まず動きます。つまり、子どもと親とつながることから、そうしなければ孤立した親はどうやって表現していいか分からないですよ。そうすると強く学校にあたる

と、すぐ「モンスター」というふうにジャッジされますね。で、それ以上前に進まなくなります。学校の方でもそういうふうに「モンスター」というふうな、「ちょっと難しい親だよね」っていうようなジャッジしてしまいます。それ以上この子が救われる道って、なかなか発展してきませんよね。ですから、あくまでも、私が入る時には、親からまず一回、私が聞いて、学校にリクエストする時に、出来れば私を介入してくれた方が一番話が早くて、場合によっては保護者の方にも意見することもたくさんあります。

みなみ　なるほど。

米田　ですから、孤立して、特にこの今、不登校等で孤立している子の問題というのは、本人が一番そりゃつらいのでしょうけれども、やはり一緒の保護者が非常につらいっていうことをやっぱり理解して、対応しなければ解決の道は見えてきませんね。

みなみ　いやー、本当にもうそんな米田先生がいて下さるだけで、むちゃくちゃ心強いですよね。

大西　ほんとにね。ありがたいと思いますよ。

みなみ　実はね。あのー、モーニングママス、先月もちょっと不登校の話題に触れて、その話も実はしてたんですよね。当事者の親御さんが自分で立ち上がって……、立ち上がってというとたくましい感じだけれど、ゆるやかにいろいろな方とつながり合って、同じ状況の子のお母さん同士でまずはつながって、まずは安心してお話しできる場が欲しいよねということで……。なかなか理解を得られなかったり、当事者でないと分からない悩みとか悲しさとかつらさとかいろいろあると思うんですよね。

大西　ほんとにあると思う。

みなみ　それをその悩みがない人に話しても何かこう違うリアクションがかえって来たりとか、よりに寂しい孤立感を感じたりするんだけれども、同じ当事者の同じ立場の中でまずはつながりを作りましょうっていって……。まあ、そんな話をちょうど先月していたので、何かすごい続きだなって……。

大西　ストーリーになってますね。

みなみ　まあ、今、曲の間もいろいろとお話を伺っていたんですけれども、不登校、まあ不登校という言葉は、先月も少し話をしていたんですけど、なんか不登校以外に何か良い言葉があったら良いよねと言って、学校を行きたくてもいけないという状況もあるだろうけれども、行かないという選択肢もあっても良いしねって……。不登校になったあとに、学校に戻すことを最終ゴールじゃなくて、その子の教育にとって何が一番良いのだろうっていうことを考えたゴールっていうのがあったら良いよねっていう話しもちょっとしていたんですけれども……。今、米田先生もね。……学校の先生ともお話しなさる機会があるんですか、よく？

米田　子どもを間においた時に、当然、学校の先生方にも協力を求めますし、やって欲しいこと、たくさん出てきますので……。ただ、今、お話にあった通り、学校に戻すことを最終目的としているわけではありません。それはあくまでも、個によって……、いろいろです。ですから、ケースによってはいわゆるそ

の学習の多様化が必要な子もいます。で、たとえばそのご病気で、今一番多いのは起立性調節障害……あたりで、学習のチャンスが少ないって子に対しては学習のチャンスを与えていく。

米田　これら(起立性調節障害等病気が原因で学校に行けない)の子たちは最終的に病気が治って学校に戻れば……という子もいますし、いわゆるその……病気じゃなく、不登校、一般的な不登校って呼ばれているケース。まあ、一般的って、何が一般的かっていう問題がありますけれども、いわゆるその学校に行けないよっていう、たとえばその学校に行けなくなったきっかけが友達の関係であったり、部活の関係であったり、教師との関係であったり……、まあまあいろいろあるんでしょうけど、うん。なかなか学校に行けないっていうような子に関して、何が良いだろうって、そのケースケースで考えていくしかないですね。ですから、私が(面倒を)みている子、例えば去年からこうみている子たちでも、一人ひとり、全部違います。

みなみ　うーん。そうなんですねー。

米田　勉強を教えている子もいれば、例えば心病んでいる子あたりは、一週間に２回、必ずその心の器の……、いっぱいいっぱいになった器のお水をこぼしてもらう時間、そういうような子もいますし、いわゆるその、今の学校教育が学習に向き合えなくって、別な生き方を模索している子たちにはいろんな刺激、たとえばそのマナーの勉強をしたいって言ったらマナーの勉強。もしくは英語をやりたいからって、英会話……。その子のケースによって全部いろいろなことをやっています。同じことは一切やっていません。ですから、一人ひとりの対応が違います。

みなみ　すごいですね。そういった個別な対応ができるってなかなか学校教育では無理だろうなとは思うので……。そういったことをしてくださると、むちゃくちゃ心強いですよね……。三奈子ちゃんは、どういうふうなつながりだったんですか？　って、聞いても良いですか？　ここで。

大西　……米田さんとのつながりだよね？　私は、自分自身の子育てのお母さん友達。まあ、同級生のお母さんたちいっぱいいるんだけれども、やっぱり悩みを抱えて、自分の子が学校に行けない、行きたくてもいけない、行かないという選択肢の子もいらっしゃるとは思うのだけれども……そういうお母さんたちが、「困ったねー、困ったねー」っていう声を上げる力が出てきた時があって……。

みなみ　うんうんうん。

大西　で、私、やっぱり同じお母さんたちが困っているのを分かってても、ずけずけと入っていくということにはすごく失礼だなと思ってね。だから、あのお母さんたちが何かできっかけを作って、私にも相談してくれることがあって……。それで、私もね。今、議員のお仕事もさせて頂いているので、そんなこともあって富良野市の環境が良くなったら良いなって……。で、これ聞いた、お母さんたちから聞いたこれをどう解決したら良いんだろう……って、そんな時に「実はすごい方がいるの」って、お母さんたちが言ってくれて、出会いのきっかけを頂いてね。

みなみ　はぁー。なるほど。

大西　そうそうそう。で、会ってみたら、こんなに熱い思いを持たれた米田さんだった……ということで、私

はファンなんだよね。

みなみ　あはははは(笑)。分かる、分かる。

大西　　分かる？　で、そんなことをきっかけにね。出会いを頂いて、今があるの。

みなみ　でも、ほんとに、実際、その現場で支えてくださっている米田さんのことを、お母さんたちがもう熱く信頼しているってことだよね。

大西　　そう。そうなの。ほんとに保護者の思いって、なかなか学校にはぶつけられない……、いや、やっぱり個の関わりが必要だから、学校もそれぞれになかなか対応できない部分もあるでしょうし……。で、ね、教育委員会に言って全面的にぶつかっていくとかじゃなくて、どうやって解決したら良いのっていうのを米田さん、ヒントとかねアドバイスとかサポートしてくださるので……。そういったところがね。大事なのかなと思って……。

みなみ　なるほどねー。いやー、そうやってほんとにあの、なんか自分で学校に言うとか、自分で教育委員会に言うって、ものすごくハードル高いよね。

大西　　うん。ほんとハードル高いし、やっぱりそういって、お子さんが困っているご家庭の親御さんって、実はほんとに一緒に悩んでて、パワーもなくなっているのも現状だと思うんだよね。だから、そういった意味で米田さんにつながって、細く長く助けてもらえる、米田さんが代弁してくれる……さっきもおっしゃっていたけど、自分は代弁者なんだぁっていうことでいわれてたと思うんだけれど、そういう人って必要なんだと思う。

みなみ　ほんとにねー。いやー、すごい大事なことだなって思いますね。あの実際、そこの「共育サポート」米田さんにつながろうと思ったらどういう手段があったりするの？　たとえば今、あのー、ラジオを聴いている中で、「いや、私もほんと困ってたんだよね」ってどこともつながりなくてどうしようって、これを救いに聴いて下さっている方がもしかしたらいるかもしれないので、そういった方はどういうふうに、米田さんとつながっていけば良いのですか？

米田　　富良野市でしたら、富良野の教育委員会に電話をして「米田とつなげ」っていうふうに、富良野市でなければ……、まぁ、富良野市でもいいんですけど、ホームページから「共育サポート・富良野」で検索して……。そうすると、「共育サポート親の会」というところがありますので、そこをポチっと押して、メールでつないでくれると。

みなみ　なるほど。共育サポートの「きょういく」は「共に育つ」方の「共育」で、サポートはカタカナで、「富良野」って入れていただくと、多分、検索で上がってくるんですよね。

米田　　そうです。

みなみ　はい。じゃそちらの方、富良野は漢字でも平仮名でも……。どちらでも？

米田　　ええ、どっちでもいいと思います(笑)。

みなみ　あははは(笑)。ホームページを持っていらっしゃって、そこからつながれるようなので、あの、ぜひ「共育サポート」、共に育つの「共育サポート」でググって頂ければと。ページの方につながるかなと思いますので……。もし、お一人でお困りになっていらっしゃる方、どうしたら良いんだろうと思っていらっしゃる方、いらっしゃいましたら、ポチっと探して頂けたらなというふうに思います。

みなみ　えーと、ちょっと曲の間にもお話を聞いていて、不登校になっている子どもたちの被っている不利益についてのお話を、ちょっと米田先生の方から話して頂けるということだったので、私もぜひ聞きたいなと思います。よろしいですか？

米田　　はい。まぁ、いろんなケースがあるんですけれども、そのケースの中で、いわゆるご病気からくる登校が難しいっていう例ですね。よく、今多く言われているのは、起立性調節障害っていう子の例なのですけれども、日中やっぱりきつくてですね、夕方から活動するという子なんですが……、一生懸命勉強するんです。一生懸命勉強するんですが、例えばその学校に満足に通えないものですから、評価が、いわゆるその欠席ですとか、提出物ですね。例えば一生懸命勉強してますから、定期テストでは点数をとってもまともに点数が反映されない。そうすると、中学生ですと内申ランクが下がります。そうするとその例えば、上位高校に進学しようだとか、もしくは大学にいこうだとかいうふうに考えて一生懸命勉強する子のモチベーションがどんどんどんどん下がっていくわけですよ。点数とっても評価されないわけです。例えば８０点、９０点とっても、２とか１しかつかないという。

大西　　それはつらいわぁ～。

米田　　で、これは何度もその学校側とも交渉するのですけれども、それをやってしまったら平等じゃないだろうっていうふうにいわれるんですが、私は病気で闘っている子たちがここまでやった方がとっても値打ちがあることだと思うんですよね。ですから、そこら辺をきちっと形として表現することが教育だと思っています。もう、他の子どもたちも巻き込んでここまで頑張っているから、学校としてはこういうような評価をつけたい……。病気なのにここまで頑張っているという評価を、もっとオープンにした方が教育的には進んでいるなと思います。

米田　　そういうところで、その、例えばその、「不登校」の定義一つにとっても、まだ、その、登校日数。例えばその週いっぺん家庭訪問したから良いですよねとか、夕方、ちょっと顔出したから良いですよねとか、そういうようなことが不登校の対応って思っている人がいるんだとしたらまったく違って、あくまでも不登校の問題というのはその状況に応じて、受けている不利益の問題なんです。いわゆるそういう子たちが、学校復帰を最優先に考えるんでしたら、そのハードルを可能な限り低くする、例えば定期テストでも、夕方からしか動けないんであれば、時間をずらして受けられるとか……、そういうようなことを柔軟に対応できるようになればなあというふうに思います。ここら辺は簡単にできることですよね。学校側のきちっとした管理の中で簡単にできることで、子どもたちの学習権がより良い形で保障されるんであれば、ぜひ、そういうようなことも考えて欲しいな……と思います。

みなみ　うーん。実際、そうか、そういう評価ってそういうことにつながっていくのね。

大西　成績の付け方がね、そういうふうになっているからね。仕組みとしてね。……提出物とか、テストで何点で、何パーセント取得できたから、最終的に成績はなんぼですよ、みたいなね。

みなみ　うーん。なんかこの平等とか公平って、何なんだろうねって考えちゃいますよね。その話を聞くと……。

米田　あと、私この義務教育の子どもたちを中心にこうやってサポートしてるんですけれども、今一番、危惧しているのが、義務教育期間を終えた子どもたちはもう良いのか……ということです。義務教育期間を終えても、悩み苦しんでいる子どもたちはいる。先日あの、相談に来たケースなのですけれども、中学校の時から学校に行けなくなっちゃって、一応、高校は入ったんだけれども、もう高校も行けなくって、そのままずっと引きこもってるんですって、それが１８歳になってしまって、それまでの間、何のサポートも誰も受けていなくてただ、困ったお母さんの顔だけを見ているというケースもあります。ですからその、もし地域がもっと教育力を高めて、教育に不安のない地域を作るんだという思いあるんでしたら、当然、義務教育期間という枠をこえた形でのサポートも考えていいと思います。例えば、高校に行った後でも、病んでいる子、例えばパニック障害ですとかいう人も多いですから、そういうような形で病んでいる子あたりはこのまんまサポート、つまりある程度みて行ってあげる……、ようなものが必要だろうなと思います。ただ、その地域の教育力の向上っていうのは、ほんと多様な形でなければならなくって、それがもしできる地域であれば本当に魅力ある地域になっていくと思います。他の地域にはない、自慢できる故郷ってのを創造できるだろうなって思います。ですから、教育っていうのは本当に地域づくりだと思っています。

みなみ　いやまあ、ほんとにその通りですよね。まー、「モーニングママス」も地域でつながって子育てしようとか、子どもサポート富良野も支え合う子育ての環境を作っていこうってことで、子育て支援の方をやっているのだけれども、乳幼児期だけでなくって、子どもが小学校あがっても、中学校あがっても、高校にあがっても、やっぱりそのお母さんの関係が乳幼児期に出来ていることで、安心して相談できる関係が地域に出来ていくってことが、地域力を高めることにつながるかなって思いながら、みんなで活動はしているのですけれども、まさに教育、ほんとその通りだなと思うし、そこがまた教育にもつながっていって、社会教育等にもつながっていってというふうになっていくと、ほんとにすごく、包括的に地域力が上がっていくということになるんだろうなーと、今思いながらお話を聞いてました。いやーあのー、実際にその今、共育サポートを受けて実際にお子さんの変化みたいなものを先生、間近にみていらっしゃるかなーと思うのですけれども、どのような変化とか感じていらっしゃいますか？

米田　あのー、幸い今回みさせてもらった子どもたち、中３生５名、中２生が２名、みさせてもらったんですけれども、みなそれぞれ次のステップに無事、上がっていくことが出来ました。ケース、ケースなんでそれぞれ一言でこうだよってことはいえないんですけれども、行けなくなった原因というのも、ほんとに多様なんで、どういうサポートっていっしょくたにはこう言えないのですね。……ほんとに一人ひとりのサポートになります。ただあの、今回私、１５年くらい活動していますけれども、私、多分無理だろうなというふうに考えていたケースもあるんですけれども、それが何とか次のステップに無事、引きこもっているところから外に出てきて、また新たな、高校という社会に一歩進めることが出来たのですけれども、このケースは本当に、「人を変えるのは人でしかないな」というふうに再確認したケースです。教育っていうのは、今、ＡＩだとか云々だとか言ってますけれども、そんなものでは全くできなくって、社会との接点。あと、今日の最初に言わせてもらったんですけれども、「大人が子どもとつながって、子どもに伝え、子どもが大人になっていくという過程」、これがやっぱり教育だろうなというふうに

再認識した問題で、その子は無事に今、高校に通っています。それが出来ただけでも、私はこの一年間、良かったかなというふうに思うくらいで……。

みなみ　いやー、実はね。このスタジオに来る前にちょっと取材というか下見がてら行かせて頂いて、その時にして頂いたお話のお子さんかなと思うのですけれども。ものすごく感動的なお話というか、ドラマが一本できるねっていうくらい……。先生をぜひドキュメンタリーで追って欲しいってくらいのリクエストしていただけるようなお話だったのですけれども……、個人情報があるので、多分、先生もあのー、ひかえてお話しなされていたかと思うのですけれども。ほんとにお子さんの心にこう何かきっかけを投じられたのだとしたら、多分、ほんとたった一人の大人の力によって、多分、お子さんの心の中の何かをすごく大きく変えるきっかけがあったんだろうなというふうなお話だったので、なんかそのどんな人でもいいし、学校の先生じゃなくてもいいし、塾の先生じゃなくてもいいし、親御さんじゃなくてもいいし、本当に道端で通りすがりのおじさんでもいいのかもしれないくらい、たった一人の人がほんとにその人の、子どもの心に何か、グワーッっと鷲掴みになれるような、何かそういうアプローチが出来た時には、人って変わるというか、子どもって変わるかもしれないなって、ちょっと感じるようなお話、米田先生ではないまた登場人物が現れて、その方がきっと命懸けで関わったことが、そのお子さんに伝わったんだろうなーって、多分、命を懸けて、つながって下さったことを多分、お子さん自身感じたのかなというようなお話だったので、またどこかでね、物語になってお届けできるといいのですが……。

大西　ほんとですよね。本当に伝えていきたい話ですよね。

みなみ　ねっ、ほんとにそうだと思います。だからあの、ラジオを聞いてくださっている富良野地域の皆さんも、あのどんな職種であろうと、どんなお立場であろうと、多分、地域に子どもは住んでいると思うので、そういった意味では毎朝「おはよう！」って、例えば声かけてくれるおばちゃん、おじちゃんであるだけでもいいですよね。なんか子供がすごく落ち込んで、しょんぼり帰っているときに「おう、どうした？」って、言ってくれただけで子どもたちの心が、ちょっと光が差したりだとか……なんかそんなふうなきっかけになりうるのかなって。うーん。

大西　そうね。今なんか特にこの新型コロナウィルスのこともあって、さっき米田さん言われて、ああ、ほんとにその通りって思ったのは、今、学校に通えてない子も、それから不登校で通えてなかった子も含めて、同じベクトルをね、向いてるんじゃないかって、言われた言葉を聞いた時に、ああその通りだなとほんとに思って……。だからこそ、大人である私たちが、子どもたちにちょっと一声かけてあげるとか、子どもだけじゃないと思う。ほんとに隣り近所、外に出てみたときに顔を合わせたときに、あいさつができる関係、ちょっと一声かけられる関係ってすごく大事なことだなーって。

みなみ　ほんとに大事だよねー。でも、街になればなるほど、何かこう挨拶することが何か恥ずかしかったりとか、もしくは警戒されるんじゃないかと思ったりとか、なんかね、今知らない人から挨拶されても返すんじゃないぞ。都会の話であったりするから……。

大西　そう。「返事しちゃだめよ」みたいなね。

みなみ　世知辛い世の中だよね。そうじゃなくて、挨拶できる地域の関係が増えてったらいいなと思うし。富良野はどうですか？　そういう意味では。

大西　どうなんでしょうね。私はね、けっこう自分自身が会った人会った人にあいさつする方だからかもしれない……。つながりは強い街かなって思う。

みなみ　そういうふうに一人ひとりが何か心がけでお声かけあっていければ、すごく安心が増えるかもしれませんね。いや、そんな親御さんとの関わりも先生が持っていらっしゃるという話だったので……。親御さんの変化みたいなものも感じられますか？　そういう、お子さんの変化に伴って……。親御さんの変化とか。親御さんが変わったことで、お子さんも変わるみたいなこともあるのかなーって。

米田　……もちろんありますけれども。非常に難しいですよね。どうしてもその、悩んでいる子どもを持っちゃうと、特にお母さんはまず一番最初に自分のせいにしますね。その次に、原因を探して、例えば、対学校ですとか、対誰だとか、対部活だとか、そういうようなかたちに消化していく人もいますし、いろいろですけど……。私、基本的に原因探しはしません。いつもお母さん方に言うのは「この子どうしたい？」ということだけ聞きます。でないと、この子が例えば恨んでいる気持ち、お母さんがもっとそれを大きくしてしちゃうんですね。

みなみ　なるほどなるほど。

米田　自分もそれで荒むじゃないですか。じゃなくって、「この子はこれを乗り越えてって、次、より素敵な子になるためにどうしたい？」……そうするとお母さんはすごく理解してくれます。

みなみ　いやなんかそれが、すごいヒントというか。ものすごく大事なことですね。ついつい原因、探しちゃいますもんね。人ってね。何か後ろ側、振り返って、あれがこうしたらこうなる、ここを取り除けば大丈夫なんじゃないかとか……。原因を探したくなっちゃうけど、そうじゃないんですね。

米田　まあ、原因に問題があるところは、それは当然アレしますけれども、それよりもこの子を……、学校も一つの社会なので、ここでやっぱりいろんなことをクリアして、ハードル越えて、より大きくなって成長していかなければならない社会なんで……、そういう意味では子どもたちに頑張ってもらいたいところはきちんと頑張って……。ただ、おかしいよねって部分は当然、直していきます。お母さん方にもそういうことも言いながら、ただ、恨みだとか……そういうようなことで考えるんじゃなくって、「この子がより素敵な大人になるためにどうしましょう」というような……、もしくは一番良く、私、口にするのは「どうなって欲しい、この子に」ってことはよく聞きます。そうすると多分、同じ考えだと思います。

みなみ＆大西　うーん。

米田　私等と…みんな同じ考えだと思います。

大西　悩んでたりするとね。ついつい、こう下向ていると「どうしたい」って思い浮かばないけれど、聞いてくれたら……。

みなみ　そうね。ちょっと気持ち、顔が上にあがる感じするよね。

大西　そうそうそう。頑張れるっていうかね。

みなみ　いや、ほんとですね……。何か、いや、こういうふうになっているところ「どうしたい？」って、はっとするかもしれませんね。もしかしたら、ぱっと顔が上に向くような感じが…。うーん。いや、これからもあの、米田先生とつながって頂けたらいいんじゃないかなって、ほんとに思える人に、いっぱい出会うかもしれないないなって私もすごく思って……。米田先生がこれから、こんなふうにしていきたいとか、もし何かそういう展望的なものがあるんでしたら、ぜひ、教えて頂けたらなと思うのですけれども。もう最後になってしまいますが……。何かそんな話があればぜひ。

米田　まずは、基本的には地域作り……。地域作りの根本がやっぱり、教育が充実していかなければ……地域作りにはならないというふうに思っています。そういう意味では、地域の行政を担っている人方に、教育っていうものを今一度、上から与えられたものばかり見るんじゃなくって、すぐ目の前の、またその横の、子どもたちを見ることによって、もっともっと素敵なものを、素敵な教育行政をやって欲しいなというふうに思うのと、今ちょっとコロナで大変な時で、今、私たちとしても、学習に対して不安な声がたくさん聞こえてきています。その中で、「中３生のオンライン無料授業」っていうのを企画してて、今、個別でみますんで、これ、たくさんはみれないんですよ。ただこの休校がいつまでかかるのか分からないんで、そうなる前にまず準備をしておかなければならないという意味で、今そういうような募集もしてますのでね、よろしければ、ホームページなりで、見て確認して申し込んでくれればなあというふうに思います。

みなみ　先程、検索したら出てくるよっておっしゃってた「共育サポート・富良野」で検索していただければ、そこにつながるということですね。はい、ありがとうございました。何かまだまだお話いっぱい聞きたいなって気持ちを残しながらの終了になってしまうんですけれども、私もほんとに今日、先生がどんなことやっていらっしゃるのかっていうことを、何となく新聞で見た程度でしか知らなかったんですけれども、お話し伺えて、ほんとに私もすごく良かったです。ありがとうございました。

米田　ありがとうございました。

みなみ　お時間頂きまして。三奈子ちゃんも、リクエストしていただいてありがとうございます。

大西　こちらこそ。いつも受けて頂いてありがとうございます。

みなみ　いえいえ、ありがたく思っています。ありがとうございます。

大西　今日も何か胸がじーんとする話をしてもらったので、ありがたかったです。

みなみ　ありがたいです。また、先生とちょっとつながりたいなって方はぜひ、検索していただければなと思いますので、探してみてください。ということで、みなさんありがとうございました。

終了